

動機論序説 (1). [初回]

佐野健治

人間が自分で世界を創造することができない
かぎり、動機の問題には本質的に謎めいたも
のがなければならない。 ケネス・バーク⁽¹⁾

この論は、ドストエフスキー『罪と罰⁽²⁾』の主人公ラスコーリニコフの犯罪の
動機⁽³⁾を、最終印刷稿と手稿・創作ノートおよび手紙等⁽⁴⁾について考察し、人間の
行為の動機を模写する活性的システムのモデルをそこから得ようという意図か
ら発する。動機の定義はこの文の主題でもあり、結論でもあるが、出発にさい
して用いようとする尺度は注(3)に述べた。研究の手順は、まず最終印刷稿の第
1部のテキストの叙述をクロノロジー（時計時間的進行）に置き換えて、犯行
の動機にかかわるラスコーリニコフの思考と行動を俯瞰する。行為上の老婆殺
しはこの第1部で完了する。次いで創作ノートの残存原稿と準備資料第1稿～
第3稿の中に、動機についてドストエフスキーが練ったプランの多様な代案を
見る。さらに、最終印刷稿の第2部～第6部およびエピソードについて動機を
検討する。この後、以上の検討から得られた要件を取り出して結論とする。

第1部（印刷稿）に見えるラスコーリニコフの犯行の動機

「あのような事⁽⁶⁾ какое дело を企てようとしていながら、こんな些細なことを恐れるなんて?」「ほんとうに、おれにあれ это ができるのだろうか?」
(I 1 = 第1部第1章, 以下同様)。

ラスコーリニコフは、作品の冒頭で、上記のような文を含む独白をする。「あのような事」、「あれ」という、少なくとも初めての読者にとってその意味が不明な、しかし主人公にとって自明らしい、私的な用語を使って、彼は自問自答する。恐らく読者はここで「あれ」とか「あのような事」という言葉の指すものについて、根拠というほどのものではなくても、ほぼ一致した想像をすることだろう。『罪と罰』の冒頭において使われるこの表現は、後に述べられるはずの犯罪、犯行を指すということを事実上作者の側が半ば強要するようなやりかたで作品は出発する。「あれ」は、馬の虐殺の悪夢の後、ラスコーリニコフがそれを、自分の老婆殺し計画についての独白の中で活写してみせる（I 5）まで、読者に伏せられている。その代り、「あれ」が主人公の内に発生し、彼に取り憑いてきた事実と思考の経過については、詳細にわたって叙述される。こうして、作者が手稿に言う「小説の主要なアナトミー あいまいな点を完全になくすこと、すなわち、あらゆる方法で、殺人のすべてを明らかにし、彼の性格とさまざまな関係を明確に定めること」とは、実際には、明示される部分と、明示されない部分からなる、二つの流れを撚り合せた文脈を意味する。そして、明示される部分の叙述が「進み過ぎる」と、「彼（ラスコーリニコフ）が最後の決定に到達するまでの全過程は省略することにしよう。それだけでなく、われわれはあまりにも先走り過ぎたのである」（I 6）というところへ作者は「逃げ込む」。そして上に言う二つの流れ（二つとは、明示されない流れもあるということにしか過ぎない）の統一した文脈とは決して単一のプロットを追う水脈に非ずして、文脈自体がいくつとも定めがたい様々な流れ（支流とは限らない）の複合なのである（単なる集合ではない）。だがそれは後半のことにして、テキストを犯行の動機にかかわる要件に限って順次検討する作業に取りかかる。

作品上のクロノロジーにおいて、最初にラスコーリニコフが「あれ」を意識するようになるもとは、事件からひと月半ほど前、彼が初めてアリョーナ・イヴァーノヴナを訪ねて入質した時身に覚えた「抑えようのない嫌悪の念」に直接の源流を発している（I 6）。その時質草になりそうなものは、父の古い時計

と、妹と別れるとき記念に贈られた、赤い石が三つはめこまれた金の指輪があった。後者を置いて「お札」を二枚借りたが、「老婆を尋ねあて、ひと目見ただけで、まだ相手のことを何ひとつ知りもしないのに、抑えようのない嫌悪の念を覚えた」。帰る途中、薄汚ない小料理屋に立ち寄り、「お茶を注文し、腰を下ろすと、じっと考え込んでしまった。卵から雛がかえるように、奇妙な考えが頭の中に生まれ、むやみに彼の心を捉えてやまないのである」。Он спросил чаю, сел и крепко задумался. Странная мысль наклёвывалась в его голове, как из яйца цыпленок, и очень, очень занимала его. 奇妙な考え странная мысль が、どういうものであるかは説明されない。わずかな距離を歩いてきて座る間にそれが生まれた。作者の力点は、それが思弁の産物というよりは、「自然発生的」な産物であることに置かれている。アリョーナ・イヴァーノヴナの外見は、語り手ドストエフスキーによると「六十歳くらいの、ひからびた小柄な老婆で、するどく意地の悪そうな目と、するどくとがった小さな鼻をしていて、頭には何もかぶっていなかった。あまり白髪が目立たない亜麻色の髪には、油がべっとり塗られていた。にわたりの足にも似た細くて長い首には、なにやらフランネルのぼろきれらしいものが巻きつけられ、肩からは、この暑さだというのに、もうすっかりすり切れて黄ばんだ、毛糸のジャケットがぶらさがっている。老婆ははっきりなしに咳をしたり、唸ったりした」。それに対してラスコーリニコフは抑えようのない嫌悪の念を覚えた。ここに自然発生的な嫌悪感という動機のインデックスがある。この動機は、予め彼の中で培養されつつあった或るアイデアに作用して「奇妙な考え」を生んだ。この過程は少なくとも自然発生的であり、自発的であり、主体的であることに留意しておこう。

ラスコーリニコフが立ち寄った小料理屋には、隣の席に見覚えのないひとりの学生と若い将校が座っていて、学生は思いがけないことに、アリョーナ・イヴァーノヴナの住所を将校に教え、彼女の噂話を始めた。これを聞いてラスコーリニコフと読者は、彼女についておよそ次の知識を得る。

(1). ユダヤ人みたいに金持で、一度に五千ルーブルの金でも用立てることが

できる。(2). 意地の悪い気まぐれ屋で、高利を取り、期限を一日も延ばさない。(3). 三十五になる腹違いの妹リザヴェータを酷使して、稼ぎを取り上げる。(4). 多額の遺産はすべて彼女の永代供養料として修道院に納められることに決っている。(5). リザヴェータの善良な人に好かれる人柄。

ラスコーリニコフは、当の老婆について「奇妙な考え」を頭から追い出すことができずにいるとき、彼女について以上のことを聞く。「これではまるで誰かが彼をそそのかしているようではないか」と語り手ドストエフスキーは油を注いでいる。加えて主人公は、これら二人の行きずりの青年から、軽い気持の会話とはいえ、老婆殺しのは是非論を立ち聞きするという偶然に出会う。ラスコーリニコフはこの偶然を、宿命とか指示というものと結びつける。「この安料理屋で耳にした取るにたりない会話が、その後の事件の発展につれて、並外れた影響を彼に及ぼすことになった。あたかもそこには本当に何か宿命(予言) *предопределение* のようなもの、指示(天啓) *указание* のようなものがあつたかのように……」と語り手ドストエフスキーは書いている。

議論は次のような論点をめぐって行なわれる。(1). 突然、学生が主張する——「ぼくはあの婆さんを殺して金を奪っても、いささかも良心に恥じたりしない」。理由はひとつの算術が成り立つからだ。すなわち一方には、馬鹿で、無意味で、価値がなくて、意地悪で、病身の、必要のない、それどころか有害な、自分自身何のために生きているか分っていないし、明日にもぼっくり死ぬかもしれない、と彼らの言う、老婆がいる。他方には、何の援助も得られないために空しく減んでいく若い新鮮な数千人がいる。修道院へ納められる老婆の金があれば、百千の善行や事業に着手して、彼らを救うことができる。そこで、「その金の助けをかりて、全人類への奉仕、共同事業への奉仕に一身を捧げるといふ条件で」老婆を殺して金を奪う。すると「ひとつのちっぽけな犯罪は、数千の善行によって帳消しになるのではないか」と、こういう算術である。全社会という秤にかけてみれば、老婆なぞ虱か油虫の命にすぎないと言っているのである。(2). 将校がこれに対して「自然というものがあるからね」と反論するが、

学生は「いやわれわれは自然を修正したり、方向づけたりしているじゃないか」と切りかえす。(3)。しかし将校は話を実践の面に移して「じゃあ、言ってみたまえ、君は自分自身で婆さんを殺すか、否か？ 君自身が決行するのでなければ、正義もくそもない」と問いつめ、これに学生が「もちろん否さ」と答えてけりとなる。

ラスコーリニコフはこれを聞いていて異様な興奮に捉われる。それは彼自身の頭の中にも「同じような考え」также же точно мысли が生まれたばかりというのに、第三者の口からそれが語られたこと、しかも老婆のところから「たったいま自分の考えの芽生えを抱いて出てきたばかりの時に」、当の老婆の話聞かされるという暗合 совпадение に衝撃を受けたのである。「後になっていっても、彼は、この一件全体に、何か不思議なもの、神秘的なもの、いわば特別な力や暗合の存在を、見たくなるのであった」と作者は書いている。偶然に出会った見知らぬ人間の思考と自分のそれとの符合に特別な意味を認めたくなる心情を含めて、自分の思考の支持者を探すまでもなく見つけた、この偶然を、ラスコーリニコフが捉える捉え方を問題にしよう。迷信、予言、天啓、宿命、不可思議、神秘、特別さ、暗合の存在を認めることは、その分だけ自発性、自己性、主体性を放棄することに外ならない。ラスコーリニコフの非自的、非主体的態度とは、ラスコーリニコフが夢見るナポレオン像のその反対物である。この両面価値的 ambivalent 態度は、ドストエフスキーが初期の『二重人格(または分身)』двойник 以降、最大の関心を持ってきたはずの主題に外ならない。

クロノロジー的に見て、次に「あれ」が現われるのは、冒頭の、二度目の老婆訪問(проба=試験, さぐり)の件りである。この1カ月ラスコーリニコフは憂鬱といらだちの中で部屋に閉じこもっていた(I1)。「あれ」は屋根裏の「あの片隅で、あの恐ろしい戸棚の中で、もうひと月以上も熟し続けてきたのだ」(I5)。もうだいぶ「空想」に深入りしてしまった頃、自分の建物の門口から相手のところまで730歩あることを計り(I1)、犯行から二週間前には斧を吊す輪っかを考案した(I6)。

出掛ける途上ラスコーリニコフは、振り子の振幅のような両極端の独白をする。(1)。下宿代を溜めた主婦と顔を合わせるのを恐れている自らを冷笑して、「あのような事を企てようとしていながら、こんな些細な事を恐れるなんて」「人間は一切を手中にしていながら、弱気ひとつがわざわざいして、全部を棒に振っているわけだ。これは間違いなく公理だぞ。だいたい人間は……新しい一歩、自分自身の新しい言葉をいちばん恐れているんだ」と考える。かと思うと、すぐまたこう反問する。(2)。「本当に、おれはあれができるんだろうか?……とんでもない……空想をもてあそんで、われとわが身を慰めているにすぎないじゃないか。玩具なんだ!」(I 1)。主人公はこんな自問自答を際限もなく続けながら、しかし行動としては酷暑のペテルブルグの砂ぼこりの道を老婆の住む建物へ向って確かに進んで行く。すなわち、ラスコーリニコフ自身は「あれ」の実行(準備過程)を途中一度も中断することはないのである。

作者ドストエフスキーは、このような、ラスコーリニコフの思考と行動が分離平行した形で進行する運動を、「慣れ」というカテゴリーで捉えている。すなわち、「もうだいたい空想に深入りしてしまったとき」、老婆宅までの歩数を計るといったことまでしながら、その空想を自分でもまだ信じていなかった。ところが、ひと月経ったいまでは見方を変え始めていた。「例の自問自答で自分の無力や不決断をさんざんからかいながらも、その“醜悪な”空想を、どういふ具合にか、自分の意志に反してまで、ひとつの計画と見なすことに慣れてしまっていた。相変わらず、自分で自分を信じられなかったにもかかわらず」(I 1)。計画と見なすことに慣れてしまったからこそ、現にその試験をするためにこうして歩いていくのであり、ひと足ごとに、彼の興奮はますます高まっていく。この、慣れ(たびたび経験して平気になること、習熟、習慣、ならい)は、「あれ」を支える動機である。ラスコーリニコフはマルメラードフ一家との出会いから、これを自らの意識に上程し、他者の(ソーニャとその家族の)倫理と慣れの問題を考える。しかし、それを自分自身の予定する行為の審理の是非論 *казуистика* の尺度のひとつとするだけの余裕がなかった。

ラスコーリニコフは途中、自分の帽子とか、老婆の住む建物の情況、室内の様子といった「あれ」をやるための実際的な問題については結構慎重に学習を積み重ねていく。二度目の訪問では、彼の最後の質草の銀時計に対して、アリョーナ・イヴァーノヴナは前回と今回の利子を差し引いて、少額の金を貸す。偵察行の極度の緊張から、「あれ」へ向って進み続ける彼の無計画的な進行は、またもや思いがけないところから乱れる。それは彼が老婆に、「あれ」を行なうについて必要と思われる事柄、(1). 二、三日中にもう一度買入れにくること、(2). 老婆の妹リザヴェータ・イヴァーノヴナが在宅かどうかについて質問したときに始まる。(1)については「シガレット・ケースを友人から返してもらったらすぐ持ってくる」という自分のつくりごとに気がさして、どぎまぎする。(2)では老婆がそれに答えず、反対に、妹に何の用かと訊きかえす。ラスコーリニコフは即応するだけの用意がなく、狼狽して外へ出る。外へ出てその狼狽ぶりは刻一刻と激しくなる。通りまで出てきて、遂には声に出して叫んでしまう。「ああ、なんと厭なことだろう。ほんとに、ほんとに、おれは、おれは、ばか、ナンセンスだ」。「しかし、どうしてあんな恐ろしい考えが、おれの頭に浮ぶということがありえたのだ？ おれの心はなんと汚ないことを受け入れることができるものか。汚ない、卑劣で、醜悪だ。……それを、おれは、まるひと月も」(I 1)。

明らかに「あれ」へ向って進むことを阻止し、押し戻そうとする或るものがラスコーリニコフに内在して働いている。実際に彼がアリョーナ・イヴァーノヴナの実物に近づくと、それは作用する。一方において、動機が人を動かす或るものであるとすると、この或るものは反動機と呼ばれてよい。いまここで働いたものは自分の中で自分に向けられた嫌悪感である。この自己嫌悪を反動機としておく。老婆に向けられた嫌悪感との異同に注意すべきである。この振子の動作に似た、動機から反動機へ、また逆に動機へという往復は、間断なく、全編をつうじて、ほとんど無数に近く繰り返される。往復は色々な動機と反動機のあいだで行なわれ、振幅の大小と種類は場合によってさまざまである。動

機と反動機との間のむしろ機械的といっていような往復は、ラスコーリニコフといういわば人工的生命の鼓動するリズムである。この往復の対象が変更される時、つまり動機と反動機の形と質が転換するとき、彼の転換、つまり作品のばあい殺人や告白や更生が始まる。更生は、しかし、巻末で示唆される方向づけに過ぎない。ここでは、どちらかと言えば人造人間的であるラスコーリニコフのダイナミズムの起伏のリズム、もっと言えば機械的人間の機械的側面（すなわち人間的側面でなく）の単純な往復運動のリズム（何がその最初の波を起こさせたかは別として）が全巻を通じて片時もやまずに波打っていることに注目するにとどめよう。反動機はたしかに人を鎮静浄化させる。

この或るもの、反動機について「彼は言葉によっても、叫びによっても、自分の昂ぶった心を表現しつくすことはできなかった」と作者は説明する。その或るものは、訪問の結果として生じたのではない。それより以前、「まだ彼が老婆の家へ向う途中から、早くも彼の心を圧迫し、混濁させはじめていた底知れぬ嫌悪感が、いまではとてつもなく大きな姿に成長し、まざまざとその正体を現わしたので、彼は憂鬱のあまり、身の置き場もないような気持だった」（I1）。当然、「あれ」への彼の進行を鼓舞する動機と、底知れぬ嫌悪感や憂鬱を彼に味わわせることによって進行を阻止しようとする反動機とは、振子の往復のごとく、どちらかが交代に現われるが、しかし同時的に、常に、内在的に両者は働いていて、絶えず相互に闘争している。動機はある一定の増殖を経過するとラスコーリニコフの中で爆発して新しい質を獲得するか、またはベクトルを反対に転換させて反動機に転じるようである。けれどもまた、爆発の繰り返しは慣れを定着させる〔躁鬱コンプレックス〕。

今度の爆発の結果、彼は酔っぱらいのように往来の人にぶつかりながら歩き、次の通りまで来てようやくわれに返る。そして、さきほど突然自分を襲った無力感は空腹のためであると考え、酒場でビールを一杯飲む。目まいがして焼けつくような喉の乾きに苦しめられていた彼は、たちまち気持が楽になり、考えもはっきりする。ここから、物質的生活条件を、動機複合の目次の一項目

に挙げるべきである。「あれはつまらないことなんだ。……ただ体の調子が悪かっただけのことさ」。彼は「不意に恐ろしい重荷から解放されたかのように、すっかり明るい顔になり、愛想のよいまなざしで、周囲の人びとを眺めた」。これは無論、問題のすりかえであり、自己欺瞞にすぎない。その意識は同時平行的に彼の中であって、彼に信号を送っている。ドストエフスキーは書いている——「しかしいまこの瞬間でさえ、彼はどこか心の奥の方では、すべてを良い方へとろうとするこの傾向そのものが、病的なものであることを予感してはいたのである」。

試験訪問の咎めが彼の中に呼び起こした、自己嫌悪感という反動機は、彼の中で作用して「何か」を発生させる。その「何か」は、一切の交際を避けていたラスコーリニコフを、突然、人間の方へ引きつけた。それは人間を拒否する衝動とは正反対の、人間を求める衝動であり、「あれ」への進行とは反対の方向をもつベクトルである。この「何か」はもうひとつの反動機である。彼の中で「何か」が新しい事のように起こりつつあった。それと同時に、人間にたいする一種の渴望のようなものが感じられた。この「何か」は「何か新しい事」である。この、人間の方へラスコーリニコフを引きつける「何か」は、その後作品の終末で、彼が「更生」へ向って進行を始めたように見える、あの転換を支える「何か」と類似する。目下のところラスコーリニコフは、「これまでまるひと月もの間、深い憂鬱にとざされ、暗いいらだちに神経を磨り減らし、疲れきっていたので、たとえ一分でも、どんなところでもいい、どこか別な世界で一息つきたくなった」のだ。この「何か」はラスコーリニコフを鎮静させ、彼の前後の脈絡を見極めようとする願望のために猶予を与える。

このような疲労、消耗、あるいはさきほどの飢餓などの肉体的、生活上の要件〔例えば、心を集中しすぎたある種の偏執狂とか、この戸棚かトランクに似た黄色い小さな部屋とか〕もまた、「あれ」へ彼を押しやる動機、あるいは阻止する反動機のインデックスとして取り出した方がいいだろう。〔それほど臆病でいじけた青年だったのではない……それが。身なり、食べていない、個人的

条件、飢餓層、地方から都会へ（I 1）。手紙を読みおわると戸棚からとび出す。息苦しくなったから（I 3）。まるで棺桶みたいだわ（プリヘーリヤ）。そう、たしかに部屋の影響もだいぶある（ラスコーリニコフ）（III 3）。飢えていたために殺したのなら……いま幸福だただろう（V 4）。そこに複合的動機〔賦与された境遇・貧困・都市流出・都市生活〕を設定する。

酒場でのマルメラードフとの出会いと彼の演説は、ラスコーリニコフに二つの間に答える課題を与える。(1). 追いつめられた人間の最後の行き場, (2). 人間全体が卑劣漢であるのか（I 2）。(1)は哲学的問題というよりも、都市へ流れついた飢餓家族の実際的な問題であり、その点の深刻さではラスコーリニコフ一家はマルメラードフ一家とパラレルであり、選ぶところはない。「生まれながらの畜生である」と自己卑下するマルメラードフは「これ以上行くべきところがない」という行きづまりに行きついて、頓死する。これに対して、ラスコーリニコフ一家三人も、妹が合法的売春とすべき結婚を選ぶことによって兄の立身を計らざるを得ないという境遇にある。それを打破することが、ラスコーリニコフに与えられた仕事である。(2)は「慣れる」という人間の習性と倫理の関係、いわば道德の耐久性の問題である。(1)と(2)とは、この章に続く母の手紙との格闘の中で、マルメラードフの問題であるよりも、彼ラスコーリニコフ自身の問題として彼に答えを迫る。

マルメラードフ一家のもとを立ち去りながら、ラスコーリニコフ独白——「頑張れよ、ソーニャ！ それにしても何といういい井戸を掘りあてたものだろう！……ちよいと涙を流して、そして、慣れちまった。人間という卑劣漢は、どんなことにも慣れてしまうんだ！」けれどもラスコーリニコフは、セミョーン・ザハールィチ・マルメラードフの話の聞いただけで、会わぬうちから、ソーフィア・セミョーノヴナの彼にとって確実なイメージを持っていて、それを基に次のような、作品の主題となるカズィスチカを行なう。「もし、ほんとうに、人間は、一般に人間全体は、つまり全人類は、卑劣漢じゃないのなら、あとのことは、なにもかも——偏見であり что остальное всё — предрассудки,

わざと作りだされた恐怖であるに過ぎない……」。

小説は、このあたりまで来て主人公が次のような両面価値的な性格を持つことが明瞭になる。(1). 一面では暖かい、同情的、ヒューマンな個人、他の面は冷酷な、孤立した、知性的な人間。(2). 社会を避ける面と誰かと共にいたい面。(3). なけなしをカテリーナへ与えたかと思うと、すぐ取りもどしたい衝動。(4). 大衆を風と軽蔑、殺人は一部原理的な説明にもとづく。しかしマルメラードフを風とするより、むしろ大きな同情を感じ、自分の理論と感性との矛盾。(5). パーセンテージという思考、しかし具体的個人に苦しみのゆえに惹きつけられる。ソーニャに人類の苦しみの代表を見る。

マルメラードフとの出会いの翌朝、ラスコーリニコフは下宿の主婦の女中ナスターシャから、家庭教師もやめて生計の足しになることを何もしないわけを尋ねられる。彼は「子供を教えたって、もらうのは銅貨ばかりだ。そんなはした金で何ができる？」と、まるで自問自答するかのように、しぶしぶ言った。彼女は逆に「じゃ、あんた、いちどきに、全財産 *весь капитал* [資本] をこしらえようともいうの？」と聞く。彼は、奇妙な目つきで相手を見て、しばらく黙っていたかと思うと「そう、全財産をだ *да, весь капитал*」と強い口調で答えた。ナスターシャは言う——「あんた、そんなに焦らないことだわ。そんなこと言われたら、誰だってびっくりするわよ」。ここに、犯行以前にラスコーリニコフの口から出た、ほとんど唯一の、犯行意図の一端を示唆するかのように聞こえる、他者への言葉がある。それは、「あれ」が、少なくともその一部に、相当額の金銭の強奪の意図を含んでいることを隠微な方法で読者に伝える。作者は一貫して他者の口を藉りて主人公の意図を匂わせるという手法をとる。そこで、間接的ながら、「そう、全財産をだ」というラスコーリニコフの言葉から、営利目的というインデックスを持つ動機を取りだす。

母の手紙は、妹ドゥーニャのスヴィドリガイロフ家での経緯と、母と娘とが話を進めているルージンとの結婚について書かれている。約3700語におよぶ饒舌体の、段落が途中一回しかない長文は、書き出しから末尾にいたるまで、意

図ではなく効果として、ラスコーリニコフを四方八方から問いつめ、錯綜する条理の糸でがんじがらめに縛り、身動きできなくさせ、数多くの矛盾と逆説の締木によって彼を締め上げる。母と妹の骨肉の愛から出た犠牲的な行為と配慮の一つ一つは、ラスコーリニコフに苦痛といらだたしさを強いる以外の何者でもない。なぜなら、それはいずれも、彼にとっては、許すことのできない、不可能な解決を求めているとともに、解決せざるを得ない事柄だからである。手紙は、無産の、依りどころをもたない三人家族の中で、総領のロジオン・ロマノヴィチは——「私たちの希望、私たちの期待のすべてなのです」という宣言から始まっている。手紙には、(1). ドゥーニャがスヴィドリガイロフ家で蒙った侮辱、(2). ドゥーニャがラスコーリニコフの出世のためを考えて踏み切ったというルージンとの結婚について綿々と書かれている。この綿々と、というところが、この手紙の形質をなしているのもであって、要約するとそれは伝わらないが、とりあえず要点を書き抜くと——

まずラスコーリニコフは母から「私はお前の性質、お前の気持をよく承知しています。お前は自分の妹が〔スヴィドリガイロフから〕侮辱されているのを黙って見過したりはしなかったにちがいません」と言われる。これは二カ月前、スヴィドリガイロフ家での一事件を洩れ聞いた彼が問い合せたのに対して、母が返事しなかった、その言い訳をして息子をなだめるための、思わず口から出たお世辞である。しかし、ここで、お前は「妹が侮辱されるのを見過したりしない」人間であると強調したことは、母の意図を越えて、読後、彼を自縛自縛に陥れる仕掛けとして働く。ラスコーリニコフにとって、それは抵抗なく破ることのできない網である。加えて母は、スヴィドリガイロフ家からドゥーニャが前借をしてラスコーリニコフに送金した事情を打ち明け、「ドゥーニャがどれだけお前を愛しているか、あの子がどれほど立派な美しい心(7)を持っていることか、それをお前に知ってもらいたい」「あの子は天使です」と彼の妹を賞賛する。それは後にも反復される。妹が自分を犠牲にして兄を援助したという、ラスコーリニコフにとって容認しがたい行為と、スヴィドリガイロフ家で

蒙った屈辱の実際とを知らされると同時に、お前を愛するがゆえに苦難を蒙った妹を愛するよう求められる。さらにラスコーリニコフは、もし母が一件の真相を知らせたとしても「お前に一体何ができたでしょうか？ もしかしたら、わが身を滅ぼすようなことを仕出かすかもしれないし、それにドゥーネチカにも止められました」と書く。手紙は彼を雷のように打った。それは、(1). 実際的に母と妹を援助できない彼の現状をさらけだすとともに、(2). 「あれ」への複合的動機を濃縮させ、過飽和にさせるための刺激となる。

次に母の手紙は告げている——妹ドゥーニャがスヴィドリガイロフ家で蒙った侮辱はドゥーニャ自身にやましいところがなかったのに対し、今度は、ラスコーリニコフの眼からすればもっと許しがたい侮辱とさえ言える境遇に、ドゥーニャが自らすすんで耐え忍ぶ決意を固めた、と。ドゥーニャの言葉によると「善良な方であるらしい」ルージンとの彼女の婚約の知らせである。ラスコーリニコフの自問自答の反応焔に手紙という材料が投入された。

ここで母の手紙に見えるルージン、ドゥーニャ、母プリヘーリヤの三人の思考と態度を、それぞれが言った意味をそのまま採録するようにして、書かれた順に各自の主張の要旨をまとめ、対比してみる。

まずルージンは言う、(1). 自分は実際家 человек положительный [肯定的人間] であり、「わが国の最も新しい世代と信念」を共有しており、あらゆる偏見の敵である。(2). ドゥーニャを知る前から、誠実だが持参金など持っていない、しかも必ず一度はもう貧乏な生活を経験したことのある娘をもらうつもりだった。妻が夫に恩を着ている方がよい。(3). どのみち秘書は必要であり、他人に給料を払うより身内に払ったほうがいいのは当然だが、仕事をする力があることが分ってからのことにする。ラスコーリニコフは学校の勉強があるから、事務所で仕事をする時間がないのではないか。(4). 人を判断するには、その相手に近づいてよく見る必要がある。ラスコーリニコフについても、知りあったうえで、自分自身でまとめるようにする。(5). ルージンがベテルブルグに落ち着いたら、母娘の出発について指示する。(6). 結婚式はできるだけ早く、

できることならこの肉食期に、それがあまり急で間にあわないようなら、聖母昇天祭のすぐ後に式をあげたい。(7). 母娘のペテルブルグ行き荷物や大きなトランクを運ぶ費用を受け持つ。

ドゥーニャ—— (1). あの方(ルージン)はそれほど学問はないけれども、頭はよいし、それに善良な方でもあるらしい。(2). [性格のいくらかの相違とか、古い慣習だとか、考え方がいくらか一致しないということさえあるかも知れませんが、これはどれほど幸福な結婚生活の場合でも避けることができないものです=母プリヘーリヤの言葉], その点に関しては、自分には自信がある、そのことでなにも心配する必要はない、もしこれから先の関係が誠実な、正しいものでありさえすれば、自分は多くのことを我慢できる、と母に語った。(3). [母プリヘーリヤがルージンの言葉をとげとげしいところがあると評したのに対して] 苛立った様子さえ見せて、「言葉と実際の行ないとはちがいます」と答えた。(4). [決心する前、一晚中眠らず、夜通し部屋の中を歩きつ戻りつし、長いこと聖像の前にひざまついてお祈りをした。そして翌朝] 決心がついた、と話した。(5). 兄に会えるうれしきで興奮して、一度など冗談に、それだけのためにでもルージンのところへ行ってもいいと言ったほどです。[あの子は天使です。] (6). あの子はお前に話さねばならないことがあんまり沢山あるから、いまはペンを手にする気にさえなれない。数行では何も書けないし、ただいらいらするだけだから、と伝えてほしいと。

母プリヘーリヤ—— (1). [ルージンは] 実務家 человек деловой で、忙しい方……信頼の置ける裕福な方です。勤め先は二カ所あって、もう自分の財産 свой капитал も持っておられます。年は四十五ですが、見た目になかなか感じがよく、まだまだ女性にもてるでしょう。ただ、ちょっとばかり無愛想で、尊大なところもある……いささか見栄っばりのほうで、人に話を聞かせるのが好き。(2). 前もって注意しておきますが、あの方(ルージン)と会うとき、もし一目見て何か気に入らないところがあっても……むきになって性急な判断を下すことはしないで下さい。(3). あの子のほうにも、あの方にも、特別な愛情は

ありません。(4). あの子はただ賢いばかりでなく、天使のように気高い娘ですから、自分の夫を幸福にすることを自分の義務と考えるにちがいません。そうならば、あの方も今度はあの子の幸福ということを考えてくれるでしょう。そのことを疑う大きな理由は今のところないのです。(5). なかなか目先のきくお方だから、ドゥーネチカがあの方のおかげで幸福になればなるほど、ご自分の結婚生活もよりしっかりしたものになるということをお分りになるにちがいません。(6). 最初のうち私にはなんだかとげとげしいところがあるように思われましたが、それはあの方が率直なためかも知れません。……つい口をすべらせたにちがいません。(5). あの方(ルージン)はお前にとってみたいそう有益な *весьма полезен*, いえ、何事につけても有益な方になっていただけるわけで、私もドゥーニャも、お前がもう今日からでも出世の道をはっきり踏み出すことができる、自分の運命は決ったと考えることができる、ときめこんでしまいました。もしそれが実現してくれたらねえ！ それこそ、神様がじきじきに私たちにお授け下さった慈悲としか考えられないほどの大変な利益にちがいません。ドゥーニャはそのことばかり夢見ています……ドゥーニャはいま、そのことよりほかに何も考えていません。(6). あの子はここ数日何か熱にでも浮かされたようで、いずれはお前があの方の訴訟の仕事の同僚に、いや共同経営者になれるだろう、ましてお前が法学部にいるんだからと、すっかり計画までつくりあげてしまいました。私もあの子に全く賛成で、その計画や希望はみな充分に実現の可能なものと見て、一緒によろこんでいます。(7). あの方はいまのところこの話を避けるようになさっていますが、(8). それでもドゥーニャは、自分がこの先よい影響を夫になる人に与えることによって、上の計画をなにもかも実現できるものと固く信じています。(9). あの方に学費の援助をしていただきたいという私たちの強い希望について、私もドゥーニャもまだ一言半句も口にしていません。それは、**a.** 余計なことを言わなくともあの方のほうから申し出て下さるでしょう。**b.** 近くお前が会うとき、二人を対等な立場に立たせたかったからです。(10). 二人が結婚した後、私はい

ままでと同じように一人で暮すことにしたほうがよいような気がするのです。(11). ドゥーニャの結婚が皆に知れて、私の信用も急に高くなりましたから、アフナーシー・イワーノヴィチも私の年金を抵当に、七十五ルーブル貸してくれるでしょう。旅費を差しひいて、たぶんお前に二十五、いえ三十ルーブル送ることができるでしょう。(12). ドゥーニャを、あの子がお前を愛しているように愛してやっておくれ。……わが身以上に愛していることを知ってやっておくれ。あの子は天使です。(13). そしてお前は、私たちの希望、私たちのすべてなのです。(14). もしお前さえ幸せなら、私たちも幸せになるでしょう。(15). 前と同じように、私たちの創造主、私たちの救世主のお恵みを信じていますか？ 私は内心、最近流行の不信心がお前にも取り憑いているのではないかと心配なのです。

ラスコーリニコフは読後、「戸棚かトランクに似た黄色い小さな部屋」を飛び出し、ワシーリエフスキー島の方へ向う。彼は途中、口の中で呟いたり、時には大声で独り言を言ったりしながら歩いて、通行人を唖然とさせる。語り手は言う——「手紙は彼を苦しめた。……しかし最も重要な、最も根本的な点に関しては……彼の頭の中で最終的に解決されていた。「おれの生きているかぎり、こんな結婚は実現させやしない。ルージン氏など犬に食われるがいい！」(I 4) と。母の手紙から受けた衝撃から要旨次のようなラスコーリニコフの自問自答が続く。

(1). なぜ母は「最も新しい世代」のことなど書いてよこしたのか。おれをたぶらかして、ルージン氏に好意を持たせようという目的でか？ ずるいやつらだ！

(2). 二人〔母と妹〕は互いに、どの程度まで心を打ち明けあったのだろう。二人とも気持も考えもまったくひとつだから……話合うなど無駄なことと思ったのだろうか？

母の言葉「あの男には少しばかりとげとげしいところがある」に対して、ド

ゥーニャは腹を立てて、苛立った様子さえ見せた。当たり前じゃないか！

(3). 「ドゥーニャを愛してやっておくれ、ロージャ、あの子はわが身以上にお前のことを愛しているのです」とは、一体何だろう？ 息子のために娘を犠牲にすることを承知したので、ひそかに良心の苛責に苦しめられているのか？

「お前は私たちの期待、私たちのすべてなのです！ ああ、お母さん！」 憤怒の念が彼の心の中に沸き起こり、激しくなりまさるばかりだった。今、ルージン氏に出くわしたなら、相手を殴り殺してしまったかもしれない。

(4). [花嫁とその母親が荷馬車と三等の汽車でペテルブルグまで来ることについて], ルージンさん、これはあなたの花嫁の話なんです……それに母が年金を抵当に旅費を前借することを、ご存じないはずないでしょう。もちろん、あなたに言わせりゃ、これは共同の商取引……つまり出費も半々の企業でしょうが。

(5). [汽車賃より安くつく荷物をルージンが負担することについて], ここでも実務家ルージン氏は二人を少しばかり欺いている。二人にはそれが分らないのだろう、それとも、わざと気づかぬ振りをしているのか？ とにかく満足しているんだ！ しかし……ここで肝心なのはあの男のしみったれた、けちくさい行ないではない。肝心なのは万事に見られるこの調子だ。これこそ結婚後の将来の調子なのだ。

(6). 母もまた……ペテルブルグへ出てきて、この先どうやって暮していくつもりなんだろう？ 結婚した娘との同居を「自分からお断わりします」と言っているが、一体誰をあてにしているんだろう？

おれにはちゃんと分っている。……やっぱりルージン氏の高潔な感情をあてにしているわけだ。「あちらから申し出て下さるでしょう」。……シルレル流の美しい魂はいつもこうしたもんだ。最後の瞬間まで相手を孔雀の羽根で飾りたてて……悪いことでなく、良いことばかりを期待する。内心では事の裏面を予感しているくせに……本当の言葉を自分に言い聞かせようとしない。そんなことは考えるだけでも厭わしい。……相手がこちらの馬鹿さ加減を思いしらせて

くれるまで、両手で真実を振り払おうとし続ける。

(7). 母はああいう人間だから仕方がない。だがドゥーニャは一体どうしたというのだろう？ 彼女にはあの男がはっきり見えているじゃないか。何故、こんどは承知したんだろう？

a. 事は明らかじゃないか。自分のため、自分の安楽のため、いや、たとえ自分の生命を救うためにも、自分を売り渡したりはしないけれど、他人のためとあらば……愛する人のため、尊敬する人のためとあれば……兄のため、母親のためなら売り渡そうというんだ。b. そうした場合には、われわれは自分の道徳的感情さえ押し殺してしまふ。自分の一生なんかどうなったってかまわない。自分の愛する者たちが幸せになってくれればいい。c. そればかりか、自分だけのための詭弁を考え出したり、ジュスイットに学んだりして、良い目的のためにはこうしなければならぬ……と、当座自分を説得して、心を落ち着かせたりする。われわれは、そうした人間なのだから。d. この場合、このロジオン・ロマーノヴィチ・ラスコーリニコフが主役であり……まあ、彼を幸福にしてやることも、大学を続けさせることも、法律事務所の共同経営者にしてやることも、一生を保障してやることもできるだろう。……彼はいずれそのうち大金持になり、名誉と尊敬を一身に集め、荣誉ある人物としてその生涯を終えることさえできるかもしれない。e. だが、母は？ f. いや、問題はあくまでロージャ、総領息子 *первенец* なんだ。総領息子のためとあらば……娘でさえ犠牲にしてはならないということがどうしてあろう。なんと愛すべき心……なんと正義にもとる心だろう。

(8). いや、これではおれたちだって、ソーネチカの運命を拒むことはできないかもしれない。……この世の続くかぎり永遠のソーネチカ！

この犠牲というものの重さを、二人は十分に測ってみたのか？ どうかな？ 力が及ばないんじゃないか？ 得になるか？ 理にかなっているか？ *Так ли? Под силу ли? В пользу ли? Разумно ли?*

ドゥーネチカよ、ルージン氏と一緒にいるお前の運命に比べて、ソーネチカ

の運命のほうがより汚らわしいということは、まったくないのだ、それが分るか？

(9). 「この場合、愛情はありえない」と母は書いている。だがもし愛情ばかりか尊敬もありえないとしたら、いや、その反対に、もう嫌悪と軽蔑と憎悪があるのだとしたら、一体どういうことになる？

そうなれば、また、「清潔にしている」ことが必要になる。そうじゃないか。……この清潔さとはどういうことか？ ルージン夫人の清潔さだって、ソーネチカの清潔さと少しもかわりはしない、いや、もしかしたら、もっと悪質で、醜悪で、卑劣なものかもしれない、ということが分るかね？

(10). ドゥーニャ、お前の場合にはやはりなんといっても必要以上の安楽ということが計算に入っているけれど、ソーニャの場合にはただもう飢え死にするかどうかという問題なのだからね！

(11). 「この清潔さというのは……とても高くつくのだよ、ドゥーネチカ」。もしあとになって、力が及ばなくなり、後悔するようなことになったらどうだろう？ Ну, если потом не под силу станет, раскаетесь? その時の悲しみ、嘆き、呪いはどれほどだろう、どれほどの涙を人知れず流すことになるだろう？ なぜなら、お前はマルファ・ペトローヴナじゃないのだから。

(12). それにそうになったら、おふくろはどうなってしまっただろう？ いまだっでもう苦しんでいるじゃないか。……それにこのおれは？

(13). 一体お前はおれのことをどう思ったのか、ドゥーネチカ？ おれはお前の犠牲なんかほしくない。……お母さん！ おれが活着ているかぎり、そんなことはさせやしない。させるものか！ そんなものは受け取らないよ！

以上がドゥーニャの婚約をめぐる四人の当事者（ルージン、ドゥーニャ、プリヘーリヤ、ロジオン・ロマーノヴィチ）の意見と態度の対照表である。

結婚そのものについては、こんな見方もできるだろう。これは、古今東西の結婚において一般の場合である。母妹の、というより語り手ドストエフスキーによって誇張された、ルージンへの過大な思惑というものを差し引けば、よく

ある、世間通例の、人間社会の習慣的な、結婚話に過ぎない。母娘は、無一文であるために夫に恩を着せられる〔持参金付きの娘という場合の反対〕のを承知のうえで、夫になるルージンの有用性 *utility* を息子のために、また結局は自らのために利用しようという、下心である。その点で母娘はルージンと同じ水平に立っているにすぎない。ラスコーリニコフは無論それに反発するだろう。母プリヘーリヤは生き延びる法を二人に、そして自分にも、見付けようとしている。それは最も便乗的な方法による息子の立身出世の道である。彼女の行手には今日でいう核家族問題が待っている。プリヘーリヤの二重性——娘を犠牲にして総領の出世——けれども娘にとってまず良縁である。彼女は悪い方を予感しながら、良い方を夢想する人間の一人である。妹ドゥーニャは、利他的な、骨肉の愛よりする自己犠牲に生きようとする。ただし、彼女の決心には、これからの関係が誠実で、正しいものでありさえすれば、多くのことを我慢するという留保がついている。それに対して、ラスコーリニコフは自己犠牲を装った功利主義をそこに見るとともに、実際的に力が及ばなくなり、後悔するようになる時のことを、親身になって気づかう。彼女には、兄に言われるまでもなく、はっきり見えている。そして、後にいささかきこちなく反転する (I 3)。……と、以上のような「筋のとり方」をするならば、それは、通常のロマンチズム小説のプロットである。

ドストエフスキーは『罪と罰』において、通例のプロットの完成を目ざさないばかりか、意識的にそれを無視してかかっている。しかし、ロマン制作の伝統的作法のすべてに背を向けたのではない。ラスコーリニコフが手紙を読みながら流した涙は、骨肉の愛の象徴でもあっただろう。読後に「その顔は蒼ざめ、痙攣にゆがみ、重苦しい、いらだたしげな、意地の悪い笑いが唇のあたりを蛇のようにうねった」のもまた、必ずしも歴史的な母と妹への愛情を否定するものではない。小説はそのような文脈をたどって読むこともできる。それは編集者カトコフ宛の手紙に述べられた「未完成」の思想から殺人を犯し、孤立して警察に自首するというプロットとして貫ぬかれている。そのようなものと

して読み終る読者もあるだろう。

ラスコーリニコフのドゥーニャ批判は、愛他主義を支える自己犠牲に向けられる。ただし批判はドゥーニャをソーニャと同列に置いて、二人に向けられる。「犠牲というものの重さを、二人は十分に測って見たのか？ どうか？ 力が及ばないのじゃないか？ 得になるか？ 道理にかなっているか？」ラスコーリニコフはここで初めてソーニャに正面する。注意すべきことは、彼が、自分を含めたラスコーリニコフ一家を彼女と同一の水平に置いて、同一の尺度をもって、ソーニャと、またドゥーニャと、そして自分自身と相対していることだ——「いや、これではおれたちだって、ソーネチカの運命を拒むことはできないかも知れない。……この世の続くかぎり永遠のソーネチカ！」自己犠牲を否定する彼は、あえて苦しむ人間に敬礼する。ラスコーリニコフは考える。プリヘーリヤの言うように「この場合愛情はありえない」のであれば、ソーニャの売春の方がより汚らわしいと言えない。なぜなら、対象として清潔にしている必要ということでは変りがない。ソーニャの場合、家族の生死がかかっているのに対して、ドゥーニャの場合は必要以上の安楽ということが計算に入っている、と。こうしてラスコーリニコフは、ルージンの中の『地下室の手記』で論じられた功利主義、合理主義、カピタリズムを嫌悪する一方、母妹のそれらへの迎合の徴候を見て、いやむしろそれらの支えを母妹の中に見て、苛立つのである。

母の手紙に批判の鋒先を向けてきたラスコーリニコフは、突然、われに返って、自分自身に反問を始める。ドゥーニャの犠牲を拒否するという決定——それは、彼の只今の長い自問自答の結論として割りだされたというよりも、むしろもって彼の中に用意されていた決定である。それが、手紙に触発されて姿を現わしたにすぎないと言った方がいい。そして、その自分の決定をめぐる次のような反問と自答の応酬もまた、彼の予め用意していた通りのものと言っていい。「させない？ させないために、お前は何をするというのだ？」「禁じるのか？ だが、お前に何の権利があるというのか？」「その権利があるために、

お前は二人に何を約束することができるのか?」「就職後……将来のすべてを二人に捧げるというのか?」「そんなことは聞きあきたよ。それは当てにならぬ未来の話じゃないか。」「それより、今どうするのか? 現に今、何かしなければならぬのだから。」「ところが、お前は今、あの二人から巻きあげているではないか?」 こうした問答は言うまでもなく、ラスコーリニコフが自ら恣意的に選んだ選択肢によって彼をそのような範囲へ追い込んでいくのである。

作者は、ラスコーリニコフが進んでいく「あれ」への重層的決定の過程において、母からの手紙が彼に、「あれ」へのいわば最短距離を最短時間で行く突撃を開始する命令を、与えたように説明しようとしている、かのように見えるかも知れない〔レイン『自己と他者』参照〕。結果としては、手紙はそのようなインパクトを確かにラスコーリニコフに与えた。しかしドストエフスキーが、この項の末尾に書いていることを読むと、手紙は、彼にとっては、母がそこで提起しているような形質の問題を解決することを迫って彼を襲ったのではない。彼は、確かにそれを理解しながらも、別の思索の筋道をたどっていたのである。その問題は「久しく以前から、彼を悩まし始め、心をひき裂いてしまった。現在のこうした憂悶 *тоска* はすべて、とうの昔に彼の心に芽生え、成長し、蓄積されたものであり、それが最近になって成熟し、凝縮されて、『恐ろしく、狂暴で、幻想的な問題』 *форма ужасного, дикого и фантастического вопроса* の形をとるに至り、否応なしにその解決を迫って、彼の心と頭を悩ませ、疲弊させてしまった。そして、今、母の手紙が、突然、あたかも雷のように、彼を打った」。一家の扶養義務の負い目は、彼の中で転換されて、かねてからの幻想的な問題にかたちを変えた。それを解決することは、彼にとっては「あれ」を執行することに外ならないのである。だが、手紙の与えたインパクトと、「あれ」の始動との間にはまだ深い谷がある。

この時、ある瞬間、緊張の過飽和状態にある彼の中に、自らの危機から血路を切り開いて脱しようとする強烈な衝動が走ったことだろう。彼は「今すぐ、できるだけ早く、なにがなんでも、とにもかくにも、何事かを執行しなければ

ならない、さもなければ……」という二者択一に向う。他の選択は「あるがままの運命をおとなしく、永遠に受けいれて、行動し、生き、愛する一切の権利を放棄し、自分の中にあるすべてのものを圧殺してしまう」ことであり、彼には容認できない。ここに来て読者は初めてラスコーリニコフの非凡人哲学が「あれ」への動機群に参加していることを、わずかに知らされる。非凡人への道を進むはずのラスコーリニコフは、われを忘れて叫ぶ——「さもなければ、人生 жизнь (=人間として生きること) を、完全に放棄するのだ！」そこへ、別次元「さもなければ」がそっと投入される。作者は、非凡人への選択に加えて、昨日の飲んだくれマルメラードフの設問「人間だれしも、せめてどこへなりと、行くことのできる所がなきゃありません」を、ラスコーリニコフの前に置く。

「突然彼はぎくりとした。ひとつの、これもやはり昨日の考えが、彼の頭をかすめて通ったのである。だが彼がぎくりとしたのはその考えが頭をかすめたからではなかった。その考えが必ず『頭をかすめるだろう』ということは彼にはちゃんと分っていた。予感していた。そして、それを待っていたのである。それに、その考えはなにも昨日はじめて浮かんだというものでもなかった。ただ、ひと月前には、いや昨日でさえも、それはただの空想にすぎなかったのに、……今度は突然、空想ではなく、なにやら新しく恐ろしい姿、彼がまるで知らなかった姿をとって現われたのであり、彼自身それを、突然、自覚したのである……彼は頭を激しく打たれたように感じた。目の前が暗くなった」。

以上、手紙がラスコーリニコフに与えた衝撃の連鎖を、叙述順に図式に置き換えると——

(1). 母の手紙は雷鳴のように彼を打った。ドゥーニャを自分のための犠牲にさせない。させないために、何をやる？ → (2). それらすべての問いは彼にとって古いものだが、最近になって成熟し、凝縮され、「恐ろしく、狂暴で、幻想的な問題」の形をとって、即決を迫っている。 → (3). 今すぐ何事かを決行しなければならぬ。さもなければ、人生を完全に放棄すべきだ → (4). 「お分りですか、どこへも行くべきところがないとは、どういうことか」。 → (5). あ

の考えが、新しく恐ろしい姿をとって現われた。そのことを突然、自覚した。

母妹の期待するのはラスコーリニコフが身を立てることと、言外には母妹の扶養責任を果すことである。この問いかげに対して、彼が自覚したものは、「その考え」である。それも、ひと月前には、いや昨日でさえ、空想にすぎなかったのに、今度は突然、空想などでなく、なにやら新しく恐ろしい姿をして現われた、というのだ。

犯行の動機という観点からして、これはもう重大なことのようである。ようである、としか言えない。ラスコーリニコフは、何事かを決行しなければならない、と考えたのは確かだが、主体としてこれこれの行動をすることを決定（決心）したとは、どこまで行っても書いてない。ラスコーリニコフが決心するというのが、一体あるのか。決心するという人間の精神状態とは何か？ 決心したという精神状態のトンネルの中の動態、反応、持続、消長はどんなものか？ という質問が逆に向うからこちらへ向けられている。代りに、「彼は頭を激しく打たれたように感じた。目の前が暗くなった」と書かれている。このあたりにドストエフスキーの長編小説の工夫があると言えるし、その特徴を解明する鍵が置かれているだろうが、いま動機論を試みているわれわれは、母の手紙の衝撃から、動機の凝縮された様態というインデックスを取り出しておこう。

ラスコーリニコフはK並木道に差しかかって、少女の危機を救うために、巡査に20カペイカを渡す。巡査が少女を追おうとすると、その瞬間、ラスコーリニコフはがらりと変る——「止しなさい。あんたの知ったことじゃないだろう」。彼は彼の中のもう一人に反転する。自問自答「おれに人助けをする権利があるのか？……毎年何パーセントかは消え失せる。ほかの者たちを清浄に保つために。パーセント、何と結構な言葉だ」。ラスコーリニコフの意識では、妹ドゥーニャの行く手やソーニャの生について、是非論が闘われている。[後に第2部で、犯行後、盗品の隠置に出かける時、このベンチの前を通ることがたまたまなく嫌になる＝II 2。その時になって初めて、重大な一点と相対することになったことを感じる]。

ラスコーリニコフはここで、自分自身の生活を、知友ラズミーヒンの手助けを藉りて立て直すという思案をする。I 5の冒頭、ラズミーヒンのところを訪れるかどうかをめぐって行なう自問自答は、「あれ」への進行という地図の上で、微妙なジグザグ模様を描く。微妙なのは行くか行かないかの決心の問題であるとともに、決心と自分との関係もまた微妙なのである。それはラスコーリニコフの行動の動機の生成を、作者が念入りに追跡した一例である。

(1). 「だが、おれはどこへ行くつもりなんだ」。

(2). 「ラズミーヒンのところへ行くんだった、やっと思いだしたぞ」。

(3). 「だが、何のために行くんだ？」……彼は[自分の着想に]おれながら驚いた。

(4). 「確かに、ついこのあいだも……仕事を頼みに行こうかと思ったんだ」。

(5). 「だが今となっては、彼におれを助けることなど、どうしてできよう。家庭教師の口を見付けてくれるかも知れない。……だが、それから先どうなる？ はした金を稼いで何になる？」

(6). 「一体、おれに今必要なのは、そんなものだろうか？ 彼のところへ行くなんて馬鹿げた話だ」。

(7). 何故彼が今ラズミーヒンのところへ行こうとしたのかという問題は、彼が自分で思ったよりも強く彼を狼狽させた。彼は……この一見何の奇もない行為の中に、何やら自分にとって不吉な意味 какой-то зловещий для себя смысл があるのではないかと、しきりにそれを探し求めた。

(8). 「いや、おれは本当にただラズミーヒンの力だけを頼りに一切の事態を改善しようと思っていたのか？ 一切の解決を彼に [あらゆることへの出発を彼に] 求めていたのか？」

(9). 長い物思いの後で、突然、ほとんどひとりでに、ひょっくりと、ひとつのとてつもなく奇妙な考え одна престранная мысль が頭に浮んだ。「そうだ……」彼は最後の断を下すともいうように、突然、まったく冷静な調子で言った。「ラズミーヒンのところへは行く、それは言うまでもない。……だが今

じゃない。……あれの後、翌日だ、あれが済んでしまって、何もかも新しく出直しになる時に行こう」。

(10). 突然、彼はわれに返った。「あれの後？」 彼はベンチから飛び上って叫んだ。「だが、あれは行なわれるのか？ 本当に行なわれるのか？ да, разве то будет? Неужели в самом деле будет?» 彼はベンチを捨てて歩きだした。ほとんど駆け出さんばかりだった。

以上に見られるようにラスコーリニコフの思考の転換は、必ず「突然 вдруг」というモメントの切り換えをきっかけとして起こる。相矛盾するアイデアの交代についてラスコーリニコフはケロリとしていて、彼はその時々アイデアのままに走っていく。家庭教師をしてはした金を稼いで何になるか、という拒否は、「一時に全財産を весь капитал」というアイデアを肯定させるが、それは成り上るための生活設計 [ルージンのそれのような] とは無縁であって、そのような「実用的な」目的を持たない。それは「あれ」を含む或るアイデアを指向している。そして、まさにそのことが、彼を、ラズミーヒンを訪ねようとする自分の行為に反発させる。その中に、「何か自分にとって不吉な [悪いことを予言する] зловещий 意味があるのではないか？」ここに言う不吉な意味とは、「あれ」というアイデアの方向に向っているが故に不吉と言うのか、それともラスコーリニコフの意識下の反応を言うのか、曖昧に聞こえる。偶然の中に確率以上の意味を見ようとするラスコーリニコフの、この時の思考の状態を表わす。ラズミーヒンに依拠して行なう肯定的な「改善」とか「解決」とかを超える代案を、彼の無意識は探し求める。そして長い思案の末、突然、「あれ」の後に訪ねるといふ「とてつもなく奇妙な考え」が、ほとんどひとりでに、頭に浮かぶ。それは思弁の結実として出現したのではない。「あれ」が彼の頭を横切ったとたん、彼の体の中に潜む或る力がたちまち問い返す——「あれは、行なわれるのか、本当に……？」彼の体は、「あれ」がひと月以上にもわたって熟し続けてきた、あの恐ろしい戸棚へ帰るのを嫌って、眼が向いた方へ歩き始めた。

料理屋でウォトカを一杯飲んだ後、ペトロフスキー島へたどりついて寝こ

み、幼時に百姓ミコールカが瘦馬をなぶり殺しにするのを目撃した状況を再現する悪夢を見る。その時の少年であるラスコーリニコフは、血だらけの馬の鼻面を抱いて口づけし、ミコールカに飛びかかっていく。目を覚ましたラスコーリニコフは、夢の恐ろしさに震憾する。けれども、まったく同時的に彼はミコールカでもある。ミコールカである彼は、瘦馬である老婆を殺害し、血を流す。ここで彼は初めて「あれ」という観念の具体的な絵姿をおのれの前に描写し、その行為をしているおのれのイメージ〔像、姿〕と対面する。「一体、おれは本当に斧を握って、頭に打ち下すのだろうか、あの女の脳天を叩き割るのだろうか……ねばねばする生暖かい血で足をすべらせながら、錠前を壊し、中の物を盗み、ぶるぶる震えて、それから、全身血だらけのまま身を隠す……斧を持って……本当にそんなことを？」

ラスコーリニコフにとって操作することの容易な、抽象化された彼のアイデアが、夢の中とは言え、本物のアリョーナ・イヴァーノヴナの、呼吸し、血を流す具象に転化する時、それはラスコーリニコフにとって手に負えない代物に転じる。初めての訪問で、彼は彼女の実物から拭い去れない嫌悪感を味わわれた。彼女のところを去って、小料理屋でじっと考えこむうちに、卵から雛がかわえるように、奇妙な考えが頭の中に生まれたのだった。二度目の、試験の時もまた、彼女の姿を見、声を聞き、彼女の氣勢に押されると、彼女の生のありようそのものに対して、彼ラスコーリニコフの頭脳の産物である「あれ」は、対抗すべくもないのである。「いや、あれは、たわごとだ、ナンセンスだ！……どうしてあんな恐ろしい考えが、おれの頭に浮ぶということがありえたのか？」と退却した。そして今回、子供としての自我は、血を流すアリョーナ・イヴァーノヴナの実像を見て、また全身血にまみれて彼女を殺害しているおのれの姿を見て、驚愕し、吐き気をもよおし、耐えきれないと感じる。具象の世界に足を踏み込むと、彼のアイデアは、彼が体の芯で受けとめようとする生の重さに耐え切れず、敗退する。彼が屋根裏部屋に閉じこもり、自問自答の操作に復帰すると、アイデアは自分の回路の中で自らの運動の振幅を繰り返す。しかしアイデアは

どうにかして生 *жизнь* と一戦を交えようとする。

草の上で目覚めたラスコーリニコフは、「あれ」が自分には耐えきれないことが分っているながら、なぜ再三その考えを自分の中でぶり返して自らを苦しめるのかと自問する。それへの自答——「仮に計算のすべてに一点の疑問の余地もないとしても、またひと月間に決めたことのすべてが白日のように明らかで、算術のように公正だとしても、おれには踏み切れない。……耐えきれない」。彼は神に祈る——「私の道をお示してください。私はこの呪わしい……私の空想を投げ捨てます」。そこで語り手は言う——「あたかもひと月も化膿していた腫物が突然つぶれたかのようにだった。自由、自由！ 彼は今やあの魔法、妖術、幻惑、悪魔の誘惑から自由になったのだ」。ここに「あれ」は、魔法、妖術、幻惑、悪魔の誘惑と規定される。

しかし島からの帰路、ラスコーリニコフは、突然、もうひとつの人格に転換する。その彼は正反対のことが決定されたことを、全身で感じる。それは彼が、偶然から、アリョーナ・イヴァーノヴナの義妹リザヴェータが明日の晩七時に外出することを知ったことに始まる。語り手は、次のように説明する——(1). センナヤ広場は彼のお気に入りの場所とは言え、彼にも全く説明できない、不要な回り道をしてそこへ立ちよったために、この偶然に際会した。(2). リザヴェータと商人との立ち話をただの一言も聞きもらすまいと努めた。(3). たとえ何年チャンスを待ったにしても、いま不意に現われたこの機会以上に確実な成功への第一歩を期待することなどできないだろう。(4). あのような心境、あのような状況だったからこそ、あの出会いは、彼の運命全体にこの上もなく決定的な、この上もなく最終的な影響を及ぼしたのだ。(5). 彼は死刑の宣告を受けた者のように部屋へ入った。(6). 彼は何も考えなかったし、また考えることなど全くできなかった。彼はただ全存在で突然感じた——自分には物を考える自由もなければ、意志もなく、すべては突然最終的に決定されてしまった、と。

これではラスコーリニコフは自己の行為の決定に全く参加しなかったかのよ

うだ。ラスコーリニコフは、主体的に、また倫理的に、「あれ」を、あるいはさきほど夢から覚めて全面的に否定したばかりの、血だらけの行為を、しようとして決心したのではない。最終的決定なるものは彼の意志の確認の結果なのではない。「何も考えずに、また考えることなど全くできない」状態にある人間が「すべては突然最終的に決定されてしまった」と突然感じただけである、というのである。この「最終的な決定 окончательные Решения〔複数〕」はそのまま約二十四時間持続し、老婆の部屋の一階下まで来て帰ろうかという考えがひらめいたのを除外して、その間反動機は働かなかった。語り手はそれをラスコーリニコフの迷信に帰している。「その迷信の痕跡はその後も長いこと、ほとんど消しがたいものとなって彼の心に残った。……後になっていつも、彼はこの件全体に、何か不可思議なもの、神秘的なものを、いわば、何か特別な力や暗合の存在を見たくるのであった」。こうして彼の犯行を、その完了まで支えることになった「最終的決定」と、それに先行して一転機を画した夢の後の自由とは、対照的である。それは自由とは逆に、偶然の力に対する主体の屈服という、本来ラスコーリニコフが彼のプロジェクトを進めるべき方向〔ナポレオンの精神の絶対性への方向〕とは逆のベクトルを持つ運動を彼にさせる。老婆に対して彼が斧を振り下した運動がそれである。

ドストエフスキーは、I 6 後半で、「この事件での彼のすべての最終的な決定」には、ある奇妙な特徴があった、と言う。それを要約すると、(1). 決定が最終的なものとなればなるほど、醜悪な、愚かしいものに見えてきた。(2). 終始ただの一瞬といえども、自分の計画が実現されうるとは信じられなかった。(3). 最後の一点まで検討しつくされ、最終的に決定され、どんな疑問の余地も残らなくなったとしても、彼はなお一切を、愚劣で奇怪な不可能事として断念したかもしれなかった。(4). 解決のつかない点、疑問の点は山ほど残っていた。(5). 台所の斧の無断使用といった瑣末な問題は考えてみなかったし、考える暇もなかった。(6). 彼は主要なことだけを考えて、瑣末な問題は自分がすべてに確信が持てるまで後まわしにした。(7). ところがすべてに確信を持つこと

は、ありえないように思われた〔例えば、このあいだの試験でも、たちまち耐え切れなくなって、自分に憤慨しながら、逃げ出してしまった〕。(8). 問題の道徳的な解決では、彼の是非論は剃刀のように鋭ぎすまされ、自らの内部に反論はもう見いだすことはできなかつた。(9). しかし、最後の最後となると、彼は自分を信じることができなかつた。あたかも何者かに無理やりに引きずられているかのように、奴隸的な態度で、執念深く、四方八方に手さぐりで反論を探しまわっていた。(10). 最後の日は彼の上にはほとんど物理的とも言うべき作用を及ぼした。あたかも何者かが彼の手を捉えて、否応なしに、盲目的に、度外れた力で、後戻りできないところへ引きずっていくようだった。さながら服の端を機械の歯車にはさまれ、じりじりと機械の中へ巻き込まれていくようだった。

この後、ラスコーリニコフは、犯罪の発覚の主要な原因として「犯行の瞬間に、意志と判断力の減退とも言うべき状態に陥る」という場合を挙げる。ラスコーリニコフはしかし、自分の目論んでいる計画は犯罪ではないから、そのような退行は起こらないと決めこんだ。彼にとって、純然たる物質的な困難は、全く二義的な意味しか持たず、「意志と判断力さえしっかり保っていれば」自ずと克服されるものであった。だがそれとは裏腹に、いつまでも自分の最終的な決定が、何にもまして信じられなかつた。そして事のなりゆきは、その時が来てみると思っていたものごとごとく違っていた。斧は偶然なところから手に入った。

リザヴェータの不在時間を知った後、ラスコーリニコフの最終的決定は、「自分にはもはや物を考える自由もなければ、意志もない」という意識の場で行なわれる。彼は「この一件全体に……何か特別な力や暗合の存在を見」ながら、不可抗的な歯車に巻き込まれるように行爲し、偶然の連鎖を伝わって完了する。

〔注〕

(1) We take it for granted that, insofar as men cannot themselves create

the universe, there must remain something essentially enigmatic about the problem of motives, and that this underlying enigma will manifest itself in inevitable ambiguities and inconsistencies among the terms for motives. Kenneth Burke: *A Grammar of Motives*. (われわれの前提はこうだ。人間は自分で世界を創造することができないかぎり、動機の問題について本質的に謎めいたものがなければならぬ。さらに、この背後に横たわる謎は、動機を説明するための用語の間に生じる不可避的な多義性、矛盾として発現する、という前提である。ケネス・バーク『動機の文法』、森常治訳、晶文社)。

(2) Ф. М. Достоевский: Полное собрание сочинений в тридцати томах, Изд. Наука, 1972. 日本語訳は次の翻訳を参照し、お蔭を蒙った。米川正夫訳『ドストエフスキー全集』、河出書房新社、江川卓訳『罪と罰』、旺文社文庫、小泉猛訳『罪と罰』、集英社、『決定版 ドストエフスキー全集』7, 8, 26, 工藤精一郎訳、新潮社。

(3) 動機という日本語は比較的最近の語であり、『大言海』には「動機——英語 motive ノ訳語。」と見えるが、ヘボン『和英語林集成』には記載がない。motive は The Oxford Dictionary of English Etymology によると、motion に由来し、proposition (提唱) 14世紀, that which moves a person to act (人に行動を起こさせるもの) 15世紀, motif 19世紀。最近の日本の辞書に見える語釈の一例を挙げると、「1. 事を発動させるきっかけ。人が意志を決めたり、行動を起こしたりする直接の原因、または目的。2. 英 motive の訳語。イ、倫理学で、対象または目的の観念に導かれた衝動や欲望をいう。ロ、心理学で、行動をひき起こす意識的・無意識的原因をいう」(『日本国語大辞典』)。この定義中の「きっかけ」、すなわち時間と行動と原因と目的とを抱き合わせにした語を、近代的文語に代置する役を、動機という反訳語が担ったと考えてよいだろう。また動機は、それらの内在的な原因の複合を自他ともに向って説明するという含意を持つ。cf. 動機づけ。

以上のような語の現状から、動機という語は、ここでは、例えば The Rev. Walter W. Skeat “A Concise Etymological Dictionary of the English Language” に定義されている a moving reason を、そのままの意味に、つまり、例えば心理学での使い方などに拘束されない、一般的な意味に使った。どういふことかと言うと、moving を日本語に置き替えると (1). 動かす, (2). 動く, の二通り、また reason は、(1). 理由, (2). 理由づけ, の二通りの主な反訳語があり、組合せは四通りできる。すなわち、(1). 動かす理由, (2). 動く理由, (3). 動かすことの理由づけ, (4). 動くことの理由づけ。この論では、動機という語は以上の(1)~(4)すべての使い方を含んでいる。これを作品に即してもっと平たく言うと、(1). ラスコ

ーリニコフに老婆を殺させた或るもの、すなわちその原因・動因・理由。(2). ラスコーリニコフが老婆を殺した或る原因・動因・理由。(3). (1)の理由づけ・説明。(4). (2)の理由づけ・説明。

(4) 最終印刷稿 ドストエフスキーの生存中の『罪と罰』の出版年月

1. 1866年『ロシア報知』

1月 61号 第1部1～7章

2月 8～13章〔単行本では第2部1～7章〕

4月 62号 第2部1～6章〔単行本では第3部1～6章〕

6月 63号 7～9章〔単行本では第4部1～4章〕

7月 64号 10～13章〔単行本では第4部5～6章と第5部1～3章〕

8月 65号 14～15章〔単行本では第5部4～5章〕

11月 66号 第3部1～6章〔単行本では第6部1～6章〕

12月 7～8章とエピローグ〔単行本では第6部7～8章とエピローグ〕

2. 2巻本, ペテルブルグ, 1867〔雑誌稿に比べていくらか縮小。若干のスタイル上の変更〕

3. 『ドストエフスキー選集』, ペテルブルグ, 1870, 全4巻(1867年版と同じ)

4. 2巻本, ペテルブルグ, 1876年12月の日付で1877年に発行。ドストエフスキー自身が校正刷りを読み数十の訂正をほどこしたと思われる点を除いて1870年版に同じ。普通の版が復刻・翻訳されている。

(『グロスマン年譜』, 松浦健三訳, 新潮社全集26—263, G. Gibian, A Norton Critical Edition, 1975, p. 666.の資料に依る。)

(5) 手稿・創作ノートおよび手紙等。(3)と同じ。

(6) 第1部では、「あれ」は次のようなさまざまな用語に置き替えられる——「計画全体」весь замысел, 「その空想」эти мечты свои, 「“その醜悪な”空想」“безобразная” мечта, 「あの事」самое дело, 「恐ろしい事」ужас, 「あれは」это (以上 I 1), 「その考え」одна мысль, 「空想」мечта (I 4), 「あれ」тот, 「あれ」это, 「この呪わしい, 私の空想」эт это прокнутая мечта моя, 「こうした計画」этот замысел (I 5), 「奇妙な考え」странная мысль, 「まったく同じような考え」такие же точно мысли, 「自分の考え」свои замысли, 「事」дело, 「彼によって目論まれていること」задуманное им (I 6)。

(7) ドゥーニャの「立派な美しい心」бесценное сердце の形容詞 бесценное は, без=欠+ценна=(1). 価格, (2). 努力, 犠牲, (3). 価値, 意義, という意味を含む合成語で, (1)～(3)が欠落しているという含意と, それらを評価し切れないほど内包しているという含意とを併せ持つ両義語である。すなわち, 価格がつけられない,

この上なく高価、きわめて安価と、いろいろにとれる。おまけに бec は、(1). 悪魔、悪鬼、(2). 良くないことの象徴、でもあるから、読みようによっては大変な多義語として働くだろう。ここでは、ドゥーニャの「立派な美しい心」の多義性を表わしている。この語は、作中にほとんど無数に散りばめられた同類のシンボリックキーワードの一例に過ぎないが、ドゥーニャの結婚、あるいは結婚一般について、多くを語っている。